

【ボーリング調査 深部地震動観測】

柏崎・刈羽地域周辺の深い地盤における地震動の伝わり方や揺れの増幅特性を詳細に把握するため、本学敷地内で3000mのボーリング調査を行います。調査終了後はそのボーリング孔内に地震計を設置します。この地震計から得られるデータは、柏崎刈羽原子力発電所構内深部(1700m)に東京電力が設置する地震計や、すでに設置されている周辺地域の地震計のデータとともに、原子力耐震・構造研究センターでの研究に供されます。この工事は平成22年8月から始まっており、平成23年5月に完成の予定です。



工事の状況 (平成23年2月現在)

原子力耐震・構造研究センターにおける研究紹介

「原子力発電所の耐震安全性に関わる情報の分かり易さ」

情報電子工学科
准教授 佐藤 栄一

◆新潟県中越沖地震の教訓

平成19年7月16日、柏崎・刈羽地域は震度6強の大きな揺れに見舞われました。当地域の原子力発電所も例外なくその揺れに突然襲われたわけですが、所内の原子炉は全て安全に停止し、危機的な状況避けることが出来ました。但し、地震発生時の安全情報の取扱いについて幾つか課題を残しています。国の委員会ではその課題を整理し、特に「地域住民への情報提供の遅れ」や「分かりにくい表現」を解決すべき点として挙げています。また実際に、これまでに行われた住民説明会や広報誌等に対する意見として「分かり易さ」を求める声が多く寄せられていました。本研究はこれらの背景をもとに、原子力発電所の耐震安全性に関わる情報について、その受け手である住民のニーズを把握し、分かり易く伝えることを目的に研究を行っています。

◆分かり易さを実現する「柏崎・刈羽モデル」

分かり易くするには、情報の出し手である専門家と情報の受け手である住民との間に生じている乖離を是正する必要があります。本研究ではこの解決にあたって、情報の受け手である住民の視点を重視することとしています。現在はその第一段階として、JNESが作成した耐震安全の説明資料を使い、乖離の要因を探る調査(アンケート及び面談)を実施しています。この調査では、研究室の学生が情報の聞き手(ファシリテーター)となり、地域の実態に即した情報収集を行うための重要な役割を演じています。今後は、この要因整理結果に基づき、分かり易さがどうあるべきかの定式化を進めます。この分かり易さの要因分析や定式化には、技術説明学(東大グループ)の知見を活用します。また、これらの実施プロセスを他地域へ適用することも念頭に、一連の流れを「柏崎・刈羽モデル」と称し、マニュアル化することも予定しています。

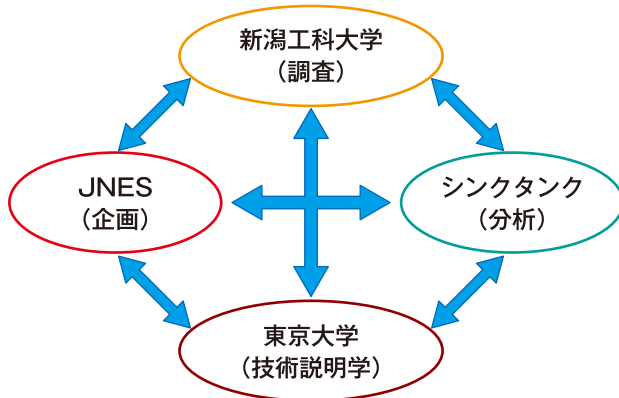


図1 研究実施体制

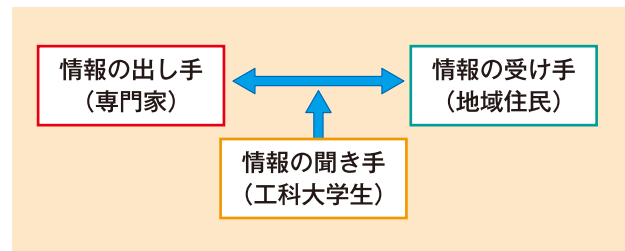


図2 調査の実施形態